

---

# 三題噺（エレキギター、紅茶、鳩サブレ）

佐々木軒助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三題噺（エレキギター、紅茶、鳩サブレ）

### 【Nコード】

N3602Z

### 【作者名】

佐々木軒助

### 【あらすじ】

一応、恋の話。

文章の稚拙さに耐えられる方のみ、お進みください。

(前書き)

とある人から頂いたお題で書いたものです。  
酷いものです。後日、加筆修正あるかも。

「例えるなら植物園だろうと思う。」

ガラス窓が並んだ壁と天井。天井からぶら下げられた幾つもの鉢植え。そして壁際に所狭しと並べられた大きなプランター。沢山の色彩の花々が空間を埋め尽くし、それぞれがガラスをすり抜けた陽光を照り返して、目に鮮やかに映る。

匂いも凄い。道端で嗅ぐことのない種々の香りが、良くも悪くも混ざり合っている。種類を気にせず、雑多においてあるからだ。けれど今みたいに換気がされていたら、甘い匂いが鼻をくすぐる。物が多いせいか、少しなら窓を開けていてもそれ程寒くはならない。

人を選ぶ環境だけど、私はこの区間によく入り浸っていた。

ギターの音が耳をくすぐる。幾何学模様の机に乗った、紅茶の湯気に向こうにその人はいた。

エレキギターを抱えて、ロックともポップともつかない旋律を奏でている。大きなアンプの傍にいるものだから、彼の細身が目につく。きらびやかな花の中に、色素の薄い彼が座っていると、ひどく遠い存在に見える。

向かいに座る彼をデッサンしていると、嫌が上でもそう思わされた。

カンバスの上を、私の鉛筆が走る。

「ふう」

粗方描いてしまったので、鉛筆を置いた。自分用に入れられた紅茶をすすする。

「あ、描き終わった？」

「……デッサンは大体すみえました。後もう少し付き合ってもらいますけど」

「ううん、やっぱり恥ずかしいんだけどなあ」

ギターを弾く手は休まない。こういう所は器用だ。あどけなくて、

母性本能をくすぐるような顔だから、そのギャップから少し騙された気になる。

そこまで長い付き合いがある訳でもないのに。

「新太郎さんって、変な所恥ずかしがり屋ですよね」

「そうかな」

「そうですね。私が初めて来た時なんて、凄くなれなれしかったのに。なんて神経が図太い人なんだろうって思いました」

一年と少し前に私、占部宮子は笠間新太郎という人に出会った。それもこの植物園。

「仮にも接客業だからねえ。初対面だろうが何だろうが、気さくに話せないと」

視界いっぱい植物は、頃合いになったら、売り物として店頭に並び。ここの裏にある花屋さんで、誰かに買われる。笠間さんはその息子であり、店員だった。

「でもさすがに、ここに人が来た時には少し驚いたよ？ 仕事仲間以外に会うとは思ってなかったから」

そう。

本来、ここは関係者しか入れない。たまたま、通りに面した扉が開け放しになっていた所に入ってしまったただけだ。

「よく、出て行けって言いませんでしたね」

「人に聞かせるのも、たまには悪くないかなと思ったただだよ。普段聞かせるのは、この子たちだけだから」

新太郎さんはぐるりと首を巡らせる。

「よく育つように、でしたっけね」

「そう。音楽を聞かせると成長が良い」

お客さんが来なくて暇な時や、休日することがないと、彼はここに来る。店は家を兼ねているので、距離はほとんどない。

「まだ信じられませんか、どうも」

植物の成長具合なんて意識してないと中々分からないし、普通がどれくらいか知らないから比較のしようもない。

そもそも、私の目的が植物にないわけだから。

でも、艶が良いことは分かった。いつかそれを指摘したら、はにかんで喜んでくれたものだ。

「お客さんは生き生きしてると言ってくれます。それからは、日課だね」

その中に私が加わって、少し経つ。

彼がギターを弾き、私はその傍で絵を描く。そんな光景。

「楽しいですか？」

「うん」

「……そうですか」

鉛筆を再び手に取った。

「さあ。続き描きますよ」

書き終わった頃には、もう日はとっぷりと暮れていた。カンバスとイーゼルを片付けて帰ろうとすると、新太郎さんは扉の前まで見送ってくれた。

「送っていいごうか？ もう大分暗いけど」

「これくらい平気です。子供じゃないんだから、一人でも帰れますよ」

そうかい？ と疑問の残る様子で、彼は首をかしげた。

私は学生鞆を漁ると、中からお菓子を取り出して、押し付けるように手渡す。

「鳩サブレです。よかったら」

「いいのかい」

「モデル料ってことで」

困ったように、だけど嬉しそうに笑った。

このどっちつかずの彼の笑顔が好きだった。

「じゃあ、さようなら」

「うん、さようなら」

さようなら。大好きでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3602z/>

---

三題噺（エレキギター、紅茶、鳩サブレ）

2011年12月12日06時45分発行